

法然上人の臨終行儀と遺言に関する考察

加 藤 實

はじめに

『四十八卷伝』（『法然上人行状絵図』又は『勅修御伝』とも言われる。）は、法然上人没後百回忌を期して作成された伝記の集大成とされるものである。法然上人の遺言については、『四十八卷伝』第三十九卷第一段に「上人臨終のとき遺言のむねあり。『孝養のために精舎建立のいとなみをなすことなかれ。心ざしあれば、をのをの群集せず、念仏して恩を報ずべし。もし群集あれば鬭諍の因縁なり』との給へり。しかれども法蓮房、世間の風儀に順じて、念仏のほかの七日七日の仏事を修すべきよし申されければ、諸人これにしたがふ。」とが記されている。また、第三十七卷第一段には「法蓮房申さく『古来の先徳、みなその遺跡あり。しかるにいま、精舎一字も建立なし。』」に始まる御詞があり、『元祖大師御法語』前篇第三十「一期勸化」にも取り上げられている。

法然上人の遺言に関しては、建久8年（1197）から体調がすぐれず、翌年の建久9年（1198）に重大な健康不安が生じている中で『選択本願念仏集』の撰述が行われ、その後の4月8日付の没後の遺言に関する文がある。この没後の遺言に関する文については、了慧（恵）によって文永11～12年（1274～1275）に編集された『黒谷上人語灯録』（以下、『語灯録』と略す。）〔漢語・和語・拾遺〕の『漢語灯録』十卷二十二篇に諸起請文という形で3点（没後起請文、七箇条起請文、送山門起請文）所収の『没後起請文』と表記された恵空本（善照寺本）と『没後遺誠文』と表記された義山本〔正徳5年（1715）に発行された正徳版〕がある。恵空本である善照寺本と谷大本（大谷大学本）とはほぼ同一内容であるが、義山本とは異なるものである。なお、本論文では恵空本によるが、その表記は、恵空文の『没後起請文』ではなく『没後遺誠文』の表記を使用する^{注1}。

『没後遺誠文』は、歴史分野では必ずしも高い評価が与えられていないと指摘

できる。田村圓澄は『法然上人伝の研究』第三部第五章「遺誡文と起請文」の中で『没後遺誡文』は円親・長尊達が自己所有権を確保するために偽作したものの指摘をしている。しかし、恵空本だけでなく、法然の弟子として法然をよく知る親鸞の『西方指南抄』「起請 没後二箇条の事」(康元2年:1257)に弟子への遺産分与に関する記述が掲載されていないが、葬家追善事の記載があることから偽作とは考えられない。なお、弟子への遺産分配が記されていない理由に親鸞への分与がないことや二箇条の意味を取り違えたためとの指摘がある。

本論文では、臨終行儀と法然上人遺言で示された①群集せず(別住)、②精舎建立(遺跡)、③追善に関する考察を行う。なお、遺産分与については、考察の対象にしない。

第1章 臨終行儀

1. 院政期の臨終行儀

日本では、平安期の1052年に末法の時代に入るとされていた。当時、仏教界では権力闘争の状況にあり、権門化が進行し、仏教の形骸化が進んでいた。院政期には、奈良南都の学僧(例、永観、珍海)や真言宗でも浄土教の教理研究の取り組みと共に阿弥陀堂建築や浄土教芸術の流行、往生伝の記述、のように日本仏教全体が浄土教に関心を持つに至った。更に、既成教団を離れて自由な活動を始める聖(例、空也)の活動等が民衆の教化にも繋がっていた。当時、阿弥陀堂建築(例、藤原道長の法成寺無量寿院、藤原頼通の平等院阿弥陀堂)の流行があったことから、臨終来迎信仰と強い繋がりと指摘できる。天皇を始め貴族・武士層に至るまで財産を惜しみなく寺院建立に注ぎ込むことで、その功德で現世と来世の安楽を祈った。阿弥陀堂には、来迎仏の像や聖衆来迎の図が安置された。これらも臨終の時に聖衆の来迎にあずかる正念来迎のためには具体的になにをすればよいのかが関心事項であった。

平安期の人々は、臨終において阿弥陀仏の来迎を受けるための正念を切望するあまり、臨終念仏ばかりを心がけ、尋常念仏を軽視する者が多かったようである。

恵心僧都源信『往生要集』冒頭の「夫往生極楽之教行 濁世末代之目足也。道俗貴賤 誰不帰者。」（それ極楽往生の教行は、濁世末代の目足なり。道俗貴賤、誰か帰せざる者あらん。）の言葉は、当時の人々の心に深く響いたものと思われる。源信は、念仏を自力他力の二つに分けて自力を棄てて他力念仏を初めて唱導し、念仏についての専修念仏を千に一失無しとした主張したことが、法然に大きく影響を与えたといわれる。『法然上人伝記』に「『往生要集』を先達となし、浄土門に入り」と記されている。源信（942～1017）は、幼くして比叡山に上がり、慈恵大僧正良源（912～985）に天台教学を学び、頭角を現わしたが、名利を嫌って横川に隠棲し学問と念仏の実践に没頭したといわれる。『往生要集』は、寛和元年（985）43歳のときに著述したもので、天台教学に立脚し、念仏の法門に焦点を絞り、世親『浄土論』所説の「五念門」の枠組みだけを活用して、往生極楽の教理および実践の体系を組織した書である。

寛和2年（986）5月には比叡山横川首楞嚴院の僧25人が集まって、『往生要集』を指南として極楽往生を目指した念仏集会である二十五三昧会が行われている。この二十五三昧会の発足後、まもなく源信が指導者として招聘され、『日本往生極楽記』の著者である慶滋保胤も絡むことになった。活動内容は、毎月15日夕方に集合して不断念仏（念仏三昧）を修することで、もし結衆中に病人が出た場合、往生院に収容して看病し、臨終に際しては皆で助けて念仏をさせ、極楽往生の手助けをする等を定めていた。葬儀・埋葬については、遺体に光明真言による土砂加持を加えた上で墓所に葬るといった死後の弔うまでのことも細かく取り決めていたとされる^{注2}。なお、法然上人は、上品上生を願う熊谷直実（入道蓮生）に対して、源信は下品上生を願われたに過ぎないと伝えている。

2. 藤原道長の臨終行儀

平安期を代表する人物に藤原道長（966～1027）がいる。栄華を極めた藤原道長も「この世をばわが世とぞ思ふ 望月の欠けたることのなしと思へば」^{注3}が詠まれた頃から身体の不調を訴え、関心が来世に向け始めて法成寺造営を急がせ、治安2年（1022）に完成させた。黄昏には、藤原道長を始めとして多くの僧が集まり念仏の声を響かせ、「浄土はかくこそは」と思われる程であったと言われる。そ

の後、娘たちに先だたれ、さしもの栄華に陰りが生じ、藤原道長は極楽往生だけを願い、ただひたすらに臨終念仏に専心したと言われる。末法に入るといわれた永承7年（1052）の少し前の万寿4年（1027）12月4日に阿弥陀堂（無量寿院）で浄土を夢見て62歳の生涯を閉じたと言われる。

藤原道長の臨終を記したものに、『栄花物語』卷三十「つるのはし」がある。この中で、法成寺で座主院源のもとで「九体の阿弥陀仏をまもらせたてまつらせたまへり。（中略）御手には弥陀如来の御手の糸をひかへさせたまひて 北枕に西向きに臥せたまへり。」と僧たちの念仏の中で臨終行儀を修したと記されている^{注4}。慈円『愚管抄』では、「万寿4年12月4日にお亡くなりになったその御臨終に明らかであろう。（中略）屏風を立てて脇息によりかかり、法衣の乱れをただしてから、座したままで御閉眼なされたのである。昔も今も、いったいこのような臨終の例があるであろうか。」との記述がある^{注5}。

藤原道長が多大な布施をしたことから確実に極楽往生したものと誰もが思っていたところ、同年12月10日藤原道長の娘威子（中宮）の夢に僧が現れて、藤原道長からの手紙を手渡された。その手紙の中で藤原道長が下品下生に往生を遂げた旨が記されていたとある^{注6}。

3. 法然上人の臨終行儀

(1) 臨終正念

法然上人の時代は、人々にとって火災、地震、飢餓、疫病等の天災が続き、不安は極度に高まっていた。末法思想の影響もあり、人々の現世での絶望感が浸透し、来世の欣求を求め、臨終来迎信仰が貴族階級だけでなく民衆にも広く流布された時期である。法然上人は、尋常念仏を軽視し、臨終念仏を重視する風潮を批判し、臨終来迎は平生念仏の利益として与えられ、臨終正念はその来迎によってもたらされると主張した。この法然上人の尋常念仏重視の考えは、臨終正念の獲得に汲々としていた人々に安らぎを与えることになったと思われる。

法然上人の晩年は、念仏を称える回数が次第に増え、余事を捨てて念仏三昧と

なり、長日七万遍を称えるほどになっていたといわれる。亡くなる3、4年前ごろから耳が遠くなり、意識も朦朧としていることが多くなっていた^{注7}。このため弟子の信空、証空、源智などが法然の側を離れずに看病していたが、病状は次第に重くなって行ったと伝えられている^{注8}。

建暦2年(1212)正月元日には、年始の朝勤行が出来ずに病臥することになり、ついに立つことも出来なくなったとされる^{注9}。『御臨終日記』では、建暦2年(1212)1月2日から食事がほとんど喉を通らなくなり、かなり病状が悪くなり、いよいよ白い雲を紫色と見る日が近づいてきた。それでも念仏の功德を褒め称え、高声の念仏が絶えなかったと伝えられている。

1月11日の朝には、法然上人は身体を起して念仏を称えると共に、弟子には見えないが法然上人には確かに阿弥陀如来や菩薩衆の来迎があることを告げていた^{注10}。死期が近づくとともに不思議なことに昔のように耳が聞こえ、目もはっきり見えるようになったと伝えられている^{注11}。そして、往生のことだけを語り、絶え間なく念仏をととなえ、睡眠中も口がかすかに動いて念仏をしていた。弟子たちは、『往生要集』に記された臨終行儀を行おうとして青・黄・赤・白・黒の五色の糸を阿弥陀仏像の御手に括り付けて、もう一方を法然上人に握らせようとした。この臨終行儀は、極楽へ導かれることを願って、藤原道長をはじめ広く行われていたものであった。法然上人の『一百四十五箇条問答』二十に「五色の色は、いかが引き候べき」と記されてもいる。しかし、法然上人は「普通の人ならそうするが、自分はそのようなことはしない」と言って拒否をしたことが伝えられている。このことは、阿弥陀仏の来迎がただ念仏による臨終正念を示そうとしたためであると思われる。

1月23日には、『一枚起請文』を弟子の源智に授けた。1月25日昼頃からは、念仏の声が次第に細くなり、臨終の時を迎える。慈覚大師円仁から相伝の九条の袈裟^{注12}をかけた法然上人は、頭を北に、顔を西に向けて『観無量寿経』「真身観文」の一節にある「光明遍照 十方世界 念仏衆生 攝取不捨」と念仏を称えつつ、眠るように息絶えられ、専修念仏に捧げた80年の生涯を終え、往生の素懷を遂げたのである^{注13}。円仁から相伝され叡空に伝わって来た^{注14}袈裟をかけたことは、法然上人が天台宗と繋がりがあるとの認識を弟子たちが理解していたためと

思われる。

(2) 戒師

法然上人は、美作国久米稲岡庄の押領使である父と秦氏出身である母の一人っ子として生まれ、幼名を勢至丸と名付けられた。出生に関し、『四十八卷伝』第一卷第一段に父時国が秦氏の夢に剃刀を飲むときに懐妊したことで、「汝はらめるところ、さだめてこれ男子にして、一朝の戒師たるべし」との記載がある。この父の言葉が大きな影響力を与え、比叡山の戒師として活躍していた叡空のもとに行っただのではないかと考える。法然上人が行った説戒については、叡空入滅後の寿永3年(1184)に平重衡に行っただことが『平家物語』に記されている。

法然上人が受けた戒は、南岳大師慧思(515~577)から天台大師智顛を経て、やがて道邃に至り、道邃から最澄が伝授した天台菩薩戒である。当時の比叡山では戒を正当に出来る僧侶がない状態であったことが、『玉葉』建久2年(1191)9月29日条に記されている。このため、戒律厳守で知られた法然上人が、社会的にも貴族や皇族の受戒師として名を上げるようになった。三帝門院(高倉天皇、後白河法皇、後鳥羽院、上西門院、修明門院、宜秋門院)の受戒を行っている。

法然上人の戒を重視する御法語に『七箇条制誡』の「戒は仏法の大地なり」や『念仏往生義』の「善人にして念仏せよ。その人こそ真に仏教に順ずる者である」がある。『禅勝房伝説の詞』の中にも「衣食住の三は念仏の助業なり」の記述が見られる。しかし、法然上人は『選択本願念仏集』から理解できるように雑修雑行を厳しく戒めている^{注15}。当時の仏教界では諸行兼修が一般的な中、専修念仏を主張するための対機説法であったと考えられる。浄土宗においては、戒をたもって念仏するのではなく、念仏する中に自然と戒法が実践されてくると考えられ、浄土宗教師になるためには伝宗伝戒道場での満行する必要がある。

九条兼実(1149~1207)『玉葉』の治承4年(1180)12月29日条に「臨終正念の宿願、一期の大要なり」とあるように、臨終来迎を求めた貴族等(庶民層にはまだ十分浸透はしていないと指摘できる。)は臨終正念の獲得を目指して臨終行儀に勤しんだ。院政期にこれらの階層の者は臨終正念の現前が聖衆来迎の条件であるとする恵心僧都源信『往生要集』の思想が浸透したものと思われる。

往生伝は、往生の奇瑞を記録したものである。臨終の奇瑞があって来迎が確認され、往生が確信されるとする考えが当時の一般社会の通念であった。法然上人入滅に際して、高僧等の入滅時には奇瑞が現れるのではとの人々の期待に対して、『聖人御事諸人夢記』では多様な人々 16 名の体験した奇瑞の話を挙げてある。

九条兼実の弟になる慈円『愚管抄』巻第六では、法然上人入滅時のことを「放免されてのちついに東山の大谷というところで亡くなった。その時にも往生だ、極楽往生だと言いたてて人が集まったが、しかるべき往生の証拠はあらわれず、臨終に際しての振舞いも増賀上人（高名な往生者）などのようにとりたてていべきことはなかったのである。」と記している。慈円は、法然上人を尊敬していたにもかかわらず、このように記したのは奇瑞に一喜一憂する民衆の行動を冷めた目で見ていたからと指摘できる。

政治的な先見の明を持ち新しい感覚の持ち主で摂政・関白になる九条兼実が初めて法然上人と出会った時は、『玉葉』によると文治 5 年 (1189) 8 月 1 日とある。その後、九条兼実夫妻と法然上人との交流は続き、法然上人をして「九条殿と私とは、さきの世からの間柄である」とまで語らしめる程、親しい間柄を形成した。九条兼実『玉葉』に法然上人の名が出てくるのは、文治 5 年 8 月から正治 2 年 (1200) までの 11 年間に 9 か所である。そして、藤原定家『明月記』には建仁 2 年 (1202) 正月 28 日に九条兼実が出家したときの戒師を法然がつとめたことや、その前年の建仁元年 (1201) 10 月 17 日に宜秋門院任子（九条兼実の娘）の出家の戒師も法然上人であったことが記されている。政治的影響力のある九条兼実が受戒を通しての信頼関係の深まりの中で法然上人の専修念仏の話に耳を傾けていたことは、法然上人の教化活動に大きなプラスとなったと指摘できる。

第 2 章 別住のすすめ

私は、南都北嶺の宗祖たちが中国に留学し、直接に教えを受けて、その教説を継受して新しい宗派を樹立したのとは異なり、法然上人が中国の浄土教家たちの書物を読みぬき新しい宗派を築いたことから、日本で生まれた仏教の元祖といえ

る存在であると思う。更に、法然上人の思想は、大原談義（文治2年：1186）→東大寺浄土三部経講説（文治6年：1190）→『逆修説法』（建久5年：1194）→『選択本願念仏集』（建久9年：1198）と大きく4年ごとに体系化されていったと考える。

法然上人は、比叡山下山後の当初は草庵で、訪ねてくる人々に念仏往生の道を教え、称名を勧めていた。その教法が人々の求めるものと相まっていたことと法然上人の智慧第一の名が既に鳴り響いていたこともあり、法然上人のもとには、東大寺における三部経講説以後に念仏の帰依者が急速に増えていった。『四十八卷伝』第六卷に「化導にしたがひてさかりに、念仏に帰するもの雲霞のごとし」と、あらゆる階級の人々を帰依者としてきたことが理解できる。これに対し、旧体制仏教の象徴的な存在で、摂関家に生まれ、四度も天台座主になった慈円（1155～1225）は、法然上人の一派を「不可思議の愚痴無智の尼入道」と言っている。慈円『愚管抄』にも「建永の頃、法然房という上人があり（中略）一向専修の教えに入って念仏ばかりを信じて唱えたれば、必ず最後には仏は浄土へむかへたまうと云うて、京田舎さながら、このようになった（取意）」とあって、法然上人の説かれた念仏の教えが京都を中心として民衆の間に広がっていたことを記している^{注16}。この中で、急速に増えた弟子である聖たちが勝手な解釈を称え始めていたことからの内部対立が法然上人の存命中から既に生じていたのではと思われる。

法然上人は、仏陀入滅後の部派仏教を見るまでもなく、建久5年（1194）に起きた栄西の禅宗になされた布教停止も浄土宗存続の不安を感じていたと思われる。『一枚起請文』の文言に「この外に全く別義を存ぜず、滅後の邪義をふせんがために所存をしるし畢んぬ」があることから見ても、弟子間に意見の食い違いがあったことが見て取れる。集合すれば、教義に関する意見対立から鬭諍にまで発展する恐れもあったため万一に備えるために別住を求めて『没後遺誡文』を作成したと思われる。

法然上人は、増える念仏者に対応するため、教義面の充実を必要とした。教団化が進む中で、異端者の出現等が出始め法難への不安が生じてきたことは上記で

述べた。その不安が的中し、法然上人 70 歳の元久元年（1204）11 月 7 日には、信空に『七箇条制誡』を書かせ、署名をした弟子は 190 名になっている。この『七箇条制誡』の中で法然上人は「この 10 年、仏教の学識のない愚かな人たちが多く集まるようになった。彼らは法然上人の説と称して勝手に他宗の教を批判し、軽んじている」と記し嘆いている。元久元年（1204）の 10 年前とは 1194 年～1195 年あたりになり、『逆修説法』^{注17}を行った頃になる。法然上人は、『逆修説法』で、臨終の際に妄念を起こさずに正しく念仏するから阿弥陀仏が来迎するのではない。阿弥陀仏が来迎し光明を放ってくるから妄念が起きずに正しく念仏ができる（来迎正念）と説法している。

法然上人の多くの弟子は、ほとんど東大寺における浄土三部経講説以後に入門した念仏者と思われる^{注18}。専修念仏の教義の理解が十分でない念仏者が一か所に多く集まることで、議論しあい、それがもとで憤り、怒るようなことになって、揉めるもとなるのではとの心配から『没後遺誡文』の中で「全不可群会一処者也」（一か所に集まってはいけない）と記したものと考えられる。このため、「苦可祈我新生之蓮台、努々莫群居一所致諍論起忿怒」（ねんごろに我が新生の蓮台を祈るべし。ゆめゆめ一所に群居して争論をいたし、忿怒を起すことなかれ。）と自分の庵で念仏を行い、一か所に集まり追善の行を修してはならないと誡めたり、群居することを禁じたりして、それぞれの草庵で静かにねんごろに一昼夜もしくは七日にわたり不断念仏（別時念仏）すべきことを求め、別住するように記している。法然上人の入滅後に『没後遺誡文』に示された遺言があったにもかかわらず、世の中の行儀作法に従うかたちで、忌日には多くの人たちが廟堂に集まり、廟堂に法然上人を慕う民衆によって「真影が摸され、月忌が修」された。東山の大谷で勤められたことから大谷の月忌と呼ばれ、別時念仏を修し、説法がなされた。この集まっていた廟堂がその後の御廟（御影堂）に発展した。

第3章 追善の次第

追善とは、『岩波仏教辞典第二版』によれば、「〈追薦〉とも書く。善事を修し、

供養を施して死者の冥福を祈る行為。一般には十三仏に対応する初七日、七七日（四十九日）、百カ日および一、三、七、十三、三十三回（周）忌、あるいは命日・彼岸などに墓前に塔婆を建てて法要を行い、時には法具や仏像・堂塔を作ったり、古くは貧者に施行をしたりして功德を積み、もって死者の冥界での安穩を祈った。民間の信仰においては、死者が先祖の靈魂への昇華していくための通過儀式でもある。」と記されている。

中陰とは、現世（本有）と来世の間であって中有（冥土）の世界とも言われるものである。人が臨終（死有）を迎えると中陰に行くことになる。中陰法要は、インドから中国に伝わり、儒教と融合し、死者は死後三途の川を渡り、中有の世界を旅しながら、七日おきに計七回の裁判を受けて、その判決に応じて六道（天道、人道、阿修羅道、畜生道、餓鬼道、地獄道）の次の世界に生まれ（生有）変わるかが決まるといわれるものが鎌倉時代に定着したといわれる。なお、浄土宗では、臨終に際し極楽浄土に必得往生するとされている。

法然上人は、『没後遺誡文』の中で「図仏写経等善、浴室・檀施等行、一向不可修之、若有報恩志之人、唯一向可修念仏之行、平生之時、既就自行化他唯局念仏之一行、没故之後、豈倦寧為報恩追修雜自余之修善哉、但於念仏行尚可有用心、或眼閉之後、一昼夜自即時始之、或氣絶之後七昼夜自即日始之、或一昼夜、或一七日、至誠勤修、標識至心各可念仏、中陰之間不断念仏、動生懈倦之還闕勇進之行（図仏・写経等の善、浴室・檀施等の行、一向にこれを修すべからず。と仏像を描いたり、経典を書写したりする善い行いや、浴室を設けて水遊びさせたり、物を施したりする行も、追善のためにはまったくしてはならない。恩にむくいたいという考えのある人は、ただひたすら念仏のつとめを果たせ。法然上人の入滅後恩に報いることや追善を修するためには、念仏だけでよい。目を閉じたと聞いたときは一昼夜の間そして氣絶したと聞いたなら七昼夜の間、念仏を称える勤めをして欲しい。中陰の間は念仏を断つようなことがないように。念仏を断つようなことがあれば、怠り怠ける心が生じ、念仏への思いが薄れてしまう。）」と記している。恵空本「氣絶之後七昼夜自即日始之」の部分が義山本にも恵空本と同様な記載があるが、『西方指南抄』では欠落している。この欠落は親鸞が必得往生（命

終の後)でなく即得往生(命終同時即)^{注19}を意識していたからと考えられる。

信空(1146~1228)は、法然が帰洛し、東山大谷の禪房で没した際には、中陰法要を取り仕切ったと言われる^{注20}。隆寛は、法然上人の五七日(三十五日)の中陰の導師を勤めている。

源智(1183~1238)は、法然上人亡き後の初期浄土宗を支えた一人である。平清盛の孫の師盛の子で、平家没落のときに13歳で法然のもとに送られるが、身の安全のために比叡山に上り、天台座主慈円のもとで出家し、その後、法然上人門下に入り、晩年の法然の側で仕えた。源智は、法然上人の教えを守ってか『四十八巻伝』に「勢観房一期の行状はただ隠遁を好み」とあるのは、幼少期の平氏の残党狩りからの逃亡体験が影響して、目立つような行動をしなかったからと思われる。しかし、源智は、法然上人の一周忌を前にした建暦2年(1212)12月24日に法然の供養のために阿弥陀仏像を造立した。このとき、法然上人と結縁した人々の署名を全国に呼び掛けた。それは「結縁交名帳」として阿弥陀仏の胎内に「造立願文」と共に納められた。「結縁交名帳」には、後鳥羽上皇など朝廷の人々をはじめ、法然の弟子、源智の実家である平家一門や源氏一族ら敵方の人々に、更に民衆らの約4万6千人もの名前が見られる。なお、十王信仰にみる一周忌の如来・菩薩は勢至菩薩である。

第4章 元祖の遺跡

1. 専修念仏

仏陀の死後、仏陀を敬愛する信者たちは、その遺骨を仏塔(ストゥーパ)に納めて供養し、仏塔は仏陀の遺跡としての役割を果たしていた。日本でも他宗では、宗祖の遺跡を建立していた。

信空は、建暦2年正月に入り、最悪の事態を考えて遺跡の場所をどこにするかを尋ねたところ、法然上人は一つのところでなく念仏の聞こえるところ全てが遺跡であると答えたといわれる^{注21}。しかし、信空は、源智らとともに大谷に法然の遺骸を埋葬して廟堂を建て、月命日の毎月25日には、法然上人の遺徳をたたえて

知恩講を営んだ。源智は、吉水の禪房で法然上人入滅後の五回忌に当たる建保4年(1216)1月19日から25日までの7日間の別時念仏を修し、これ以降、月ごとの法会が恒例化となった。また、法然上人二十三回忌となる文暦元年(1234)には東山大谷の地に廟堂を再興して知恩院の基礎を築いた。

法然上人は、『没後遺誡文』の中で「雖然人心隨時而不定、好惡亦以巨量者也、(略)注委曲之狀 以所遺誡也」(人の心、時に随って定まらず、好悪またもって量りがたきものなり。(略)これらの事を鑑て、委曲の状を注ぎて、たしかにもって遺誡する所なり。)と記している。法然上人は、この当時既に自分の教えを守らない状況を認識していたものと思われる。このため、弟子たちの中から、この遺誡に対しても背き逸脱した行為をする恐れを感じていたことから、「凡有所付属皆以自筆書之」(およそ付属する所あるは、皆自筆をもちて これを書す。)と、与え伝えるにあたっては全て自筆で書くと記している。このことから『選本願念仏集』も口述で三名(遵西、感西、証空)に筆記させたが、最後に「南無阿弥陀仏 往生之業念仏為先」の21文字のみを法然上人の自筆で記すことになったといえる。『一枚起請文』の「証の為に両手印を以てす」の文言は、自筆の文章の証としての行為であったと指摘できる。

法然上人は、東山吉水の地(現在の知恩院辺り)に居を構え、ここを拠点に布教活動を行った。法然上人は、来るものは拒まず去るものは追わずであり、人々が法然上人を慕って居に集うようになったとある^{注22}。山ではなく町の中(洛西洛東の地)に拠点を置く「定住型布教」と言えるような布教・伝道教化であったと指摘できる。

法然上人の教えは自らが三学(戒・定・慧)非器と言うように南都北嶺の教えである悟りを求める仏教から阿弥陀仏の救いを求める仏教への変革にあったと指摘できる。兼修が当然と考えられていた修行に対して念仏のみの専修を主張することは、当然の如く南都北嶺からの圧力を受ける覚悟をしていたといえる。ただ、法然上人には末法期の民衆救済には専修念仏との強い思いからの布教であったと指摘できる。

法然上人の布教・伝道精神は、念仏停止に対しても「たとえ死刑に処せられても、念仏を言わないわけにはいかない。」^{註23}と一歩も譲らなかったことから分かる通り、弟子たちの心の奥底に透徹し、彼等をして能く決死的な布教・伝道を敢行せしめるに至ったものと思われる。

2. 教団のその後

法然上人教団は、門徒と義の二つに区分される。集団名をあらわす門徒は、地名で呼ばれた集団のことで、有力人物としては信空、湛空、源智がいる。もう一つの流派である義は、思想的にまとまった集団のことで、有力な人物としては『選択本願念仏集』の書写が許された証空、弁阿、隆寛、長西、親鸞の5人と共に幸西がいる。

法然上人入滅後45年目の正嘉元年(1257)に愚勧住信『私聚百因縁集』が示した法然上人の上足としての弟子としては、幸西、弁阿、隆寛、証空、長西の5名があげられている。また、法然上人入滅後90余年たった応長元年(1311)の凝然『浄土法門源流章』では、法然上人の親承面受の弟子として、幸西、隆寛、証空、弁阿、信空、行空、長西の7名をあげている。特に、幸西、隆寛、証空、弁阿、長西の5名を専修念仏の指導者としている。更に、時代を下る14世紀後半の静見『法水分流記』では、上記の7名から行空を除いて源智、湛空、親鸞を加えた9名を四門徒五義としている。なお、鎌倉時代後期の東国における法然上人滅後の分流については『観経玄義文聴聞抄』(建長6年:1254、称名寺)を文保3年(1319)正月に行われた講義で書写された中に挙げられていたのは、長西、証空、隆寛、弁阿の4流であった。

3. 弟子たちの入滅

法然上人が入滅した際のことを知る門徒・義をたてた弟子たちの入滅について以下に見てみる。

信空は、法然の一番弟子で法然上人から黒谷別所の本坊(法然上人が叡空から譲り受けたもので、信空の祖父顕時が叡空に寄進したものである。)と白川本坊(金戒光明寺の地)を譲り受けて拠点として白川門徒を形成した。入滅状況は、『四十

八卷伝』第四十三卷第一段に「行年八十三、安貞2年9月9日、九条の袈裟をかけ、頭北面西にして、上人の遺骨をむねにをき、名号をとなへ、めぶるがごとくして、おうじょうをとげられにけり。」と記されている。九条の袈裟は、法然上人のものであったと思われる。

湛空は、嵯峨野の二尊院に住み、嵯峨門徒を形成した。入滅状況は、『四十八卷伝』第四十三卷第三段に「生年七十八、建長五年五月の比より、所労の事おはしけるが、同七月二十七日念仏数百編、ねむるがごとくしてをはり給にけり。」と記されている。

源智は、賀茂（百万遍知恩寺の地）を拠点に紫野門徒を形成した。入滅状況は、『四十八卷伝』第四十五卷第一段に「勢観房源智一期の行状は、ただ隠遁をこのみ自行をもとす。（中略）生年五十六、暦仁元年十二月十二日、頭北面西にして念仏二百余篇、最後には弥陀の二字ばかりきこえて、息絶給にけり。」と記されている。弟子の中では短命であったことから健康面で不安があったことも対外的なことを避けたと考えられる。法然上人の教えの行く末の心配からと考えられる、嘉禎3年（1237）9月21日源智から弁阿に法然の正統伝持を喜ぶ書を送っていたと言われる^{注24}。その後、本山の赤築地で二門（鎮西義と紫野門徒）の間で教えについて突合せを行ったが、一つとして相違することがなく、紫野門徒は全て鎮西義の教えによることになったと伝えられている^{注25}。

弁阿は、京都から遠く離れた鎮西（九州）の地で布教し、浄土宗二祖となった。弁阿は、鎮西義を形成した。入滅状況は、『四十八卷伝』第四十六卷第四段に「嘉禎三年十月より病惱、同正月十五日（中略）らざるに、七条の袈裟を着し、頭北面西にして、五色のはたをひかへ、平生の発願にまかせて、一字三礼の自筆の阿弥陀経を合掌の母指にはさみて、念仏すること一時ばかり、最後にはことに高声にとなへて、『光明遍照』とて、いまだつぎの句にいたざらるにねぶるがごとくして寂に帰す。春秋七十七、夏朧六十四也。」と記されている。

証空は、洛西を基盤に勢力を伸ばし、西山義と呼ばれる門派を形成した。熊谷直実蓮生の念仏を聞いて、感銘を受けたことが後の発心の因縁であったという石川の禅門道遍は、証空の三心の教義を聞いたが、法然上人の説とは全く異なると

思ったという話があり、その話^{註26}に出てくる人物は証空と隆寛であった。証空は、専修念仏の教義を天台宗の宗義に接近させたと言われ、『選択集秘抄』に「師の法然は諸行の頸を切り、弟子の証空は諸行を生け捕りにする」の批評が比叡山の学僧の間に流布していたとある。入滅状況は、『四十八卷伝』第四十七卷第四段に「大衣を着し、大衆と同音に阿弥陀経を誦誦し給。(中略)本尊の御前にして念仏二百余編、西に向かひ端座合掌し、ねぶるがごとくして息たえむ。時年七十一、宝治元年十一月二十六日、午の正中なり。」と記されている。

隆寛は、念仏の回数が多いほど良いという多念義(長楽寺義)を提唱した門派を形成した。隆寛は、天台宗の行儀の影響を受けたことから臨終の念仏を重視したが、その後衰退した。道遍は、隆寛が主催した別時念仏において『観無量寿経』の講義を聴いたが、法然上人の説とは異なる思ったとある。入滅状況は、『四十八卷伝』第四十四卷第四段に「嘉禄三年(中略)同十二月十三日申時にいたりて、(中略)弥陀の三尊にむかひ、五色の糸を手につけ、端座合掌して、高声念仏二百余編のち、『往生礼讃』の文を唱たまふ。(中略)『臨終の一念は百年の業にすぐれたり』と申ければ、すこしゑみをふくみ、本尊を瞻仰し、高声に念仏し禪定に入がごとくして、をはりをとりたまひぬ。春秋八十なり。」と記されている。

長西は、念仏以外の修行でも往生できるという諸行本願義(九品寺派)としての門派を形成したが、その後衰退した。法然上人入滅後の弟子たちにより、諸行本願義は『選択本願念仏集』の教えに違背しているとして、法然上人門弟の列から外された。『四十八卷伝』には入滅状況が記されていない。

おわりに

第1章では、平安期の貴族等に拡がっていた浄土信仰についての言及から始め、当時人々に大きな影響を与えた恵心僧都源信『往生要集』に示された臨終行儀に対し、当時の救済の対象から外れ、絶望感に苛まれていた武士・農民を含めた民衆救済を始めたのが法然上人であったとの視点から考察を行った。平安期代表する藤原道長は『往生要集』に示された正念来迎を行っていた。それに対し、末法期の民衆救済を主張した法然上人の来迎正念に触れた。戒師の行動も専修念仏と

は矛盾するものではなく、九条兼実の例を見るように念仏の助業としての受戒であり、念仏者への誘導と考えることが理解できた。

第2章では、「群衆を避けよ」、つまり別住することを求める遺言についての考察を行った。法然上人も南都北嶺からの念仏の広がりに対する圧力からの回避行動としての要請であった。法然上人は、天台宗の智慧第一と言われていたことや持戒の人物として尊敬を集めていたことから考えてみるに、『七箇条制誡』の四や『興福寺奏状』の八の内容から判断すると、法然上人への直接的な批判ではないと考えられる。尊敬する法然上人のもとに集まった弟子たちの振る舞いに問題があることを示していた。

第3章では、追善を法然上人の遺言に従わずに弟子第一とされる信空の意向で実施したことへの考察を行った。世間の風儀で実施と記されているが、法然上人への民衆の恋慕の念を考慮したからと思われる。本論では直接触れなかった七七日の追善における導師・檀那の名が示されている。初七日信蓮房・大宮入道内大臣（西園寺公望の子の藤原実宗）、二七日求仏房（仁和寺の僧理覚）・別当入道（藤原惟方）孫、三七日住真房（三井寺の覚愉）・正信房湛空、四七日法蓮房・良清、五七日権律師隆寛・勢観房源智、六七日法印聖覚・慈鎮和尚（慈円）、七七日三井僧正公胤・法蓮房信空である。法然上人の四国配流につき従った長西の名はないが、長西が法然上人入滅後の師に住心房がいる。三七日の住真房と同一人物の可能性が高いと思われる。また、『四十八巻伝』の初七日の絵に不動明王図が掲げられていることから十王信仰が浸透していたことも理解できた。

第4章では、精舎建立（遺跡）についてである。法然上人入滅後の民衆の廟への集まりは、結果として知恩講となり、知恩院の建立に繋がった。浄土宗の教えが広く理解されていることを見るに、念仏の声が遺跡と考えれば、法然上人の遺言に反しているとはいえないと考えることができた。

法然上人の人柄に関しては、藤原隆信が描いた肖像画である知恩院「往生要集披講の御影」に代表されるように、金戒光明寺「鏡の御影」や二尊院「足曳の御影」を見ても、法然上人が畳に座して、首を少し傾げ、数珠を繰りながら慈愛に満ちた眼差しで話しかける姿で描かれている。法然上人が多くの人々から好かれ

るのも民衆救済にあったからだと指摘できる。しかし、法然上人は、叡空との間で念仏を称える称念と仏の姿を心に浮かべる観仏の優劣についての問答で、叡空は後者を優れているとしたことに法然上人は「称念こそが本願である」として前者が優れていると主張した。叡空は、観仏が優れているとの考えは良忍(1073~1132)の考えであるとの主張に、法然上人は「上人は先に生まれただけ」と反論したと伝えられる^{注27}。叡空は立腹して足駄で法然を打ち付けたといわれる。法然上人は、なお「経文の真意を深く読み取れば分かる」と主張するように、法の真理に対する厳しい姿勢が伺える。

法然上人は、75歳の時(建永の法難)の四国配流で今生の別れとなる恐れを心配して、弟子らが表向きだけでも念仏を停止してはとの提言に、「法難があっても念仏停止せず」との強い姿勢を示した。法然上人の人柄を表せば、道徳堅固、自行精進が甚だ強い人物だと指摘できる。更に、法然上人は「遠く離れていても念仏の同志は固く結ばれていることを忘れずに念仏を称えるべし」と弟子らを励ましたとある^{注28}。法然上人の教えを学んだ弟子たちが、法難を契機に行った地方布教の取り組みで、専修念仏の教えが広がり、現代に受け継がれることになった。

【注記】

- 1 『岩波仏教辞典第二版』で、起請は「仏神に誓って物事を約束すること。また、その約束事を記した文書。文書の場合は〈起請文〉ともいい、本文に誓いの内容を記し、この誓いに違反した場合には仏神の処罰を受けることを約束する。」196頁、遺誡は「〈遺戒〉とも書く。死に臨んで後人のために訓誡を遺すこと、あるいは遺された訓誡のこと。多く高僧の遺訓を意味する。」1018頁、と記されている。上記の説明文から見て、法然の没後文は遺誡と指摘できる。
- 2 梯 信暁『インド・中国・日本 浄土教思想史』101頁
- 3 『新編国歌大観』第五巻 1001頁下ハ
- 4 『新編日本古典文学全集 33 栄花物語③』161頁
- 5 慈円『愚管抄(全現代語訳)』大隅和雄訳 176~177頁
- 6 『新編日本古典文学全集 33 栄花物語③』174~175頁
- 7 『四十八卷伝』第三十七巻、佛教学部編『ブツダと法然』122頁

- 8 大橋俊雄『法然』276～277頁
- 9 『浄土宗全書』十七卷16頁上14行～17頁1行
- 10 『四十八卷伝』第三十七卷、『法然上人伝全集』242頁
- 11 山折哲雄『法然と親鸞』40頁、新井俊一『親鸞「西方指南抄」(現代語訳)』155～156頁
- 12 大橋俊雄『法然』100頁
- 13 山折哲雄『法然と親鸞』49頁
- 14 梯 信暁『インド・中国・日本 浄土教思想史』83頁
- 15 阿満利磨『法然を読む「選択本願念仏集」講義』115頁
- 16 慈円『愚管抄(全現代語訳)』大隅和雄訳 339頁、梶村昇『法然上人とお弟子たち』49頁
- 17 『総合佛教大辞典』法蔵館 252頁で、逆修は「逆はあらかじめの意で、自らの来世の往生菩提のために生前のうちにあらかじめ仏事を営むこと。預修ともいう。灌頂教には、生前三七日の逆修を行えば無量の福を得ると説き、地蔵菩薩経には、死後の追善仏事では七分の一の功德しか本人に及ばないが、生前の逆修では功德を全得できると説く。」とある。逆修説法は「源空(法然)の著。安楽房違西の父、外記中原師秀が七七日の逆修を修した際、法然が導師として行った講説を筆録したもの。」とある。
『昭和新修法然上人全集』234頁
- 18 梶村昇『法然上人とお弟子たち』34頁
- 19 『浄土宗聖典』第一巻249頁、『昭和新修法然上人全集』499頁
- 20 『四十八卷伝』第三十九卷、梶村昇『法然上人とお弟子たち』38頁、中野正明『増補改訂 法然遺文の基礎的研究』329～330頁
- 21 『四十八卷伝』第三十七卷、『法然上人伝全集』242頁
- 22 大橋俊雄『法然』314頁、佛教大学仏教学部編『ブツダと法然』106頁
- 23 『四十八卷伝』第三十三卷、佛教大学仏教学部編『ブツダと法然』120頁
- 24 大橋俊雄『法然』335～336頁、『法然上人行状絵図』第十七卷
- 25 大橋俊雄『法然』336頁、『法然上人行状絵図』第四十六卷
- 26 梶村昇『法然上人とお弟子たち』34頁
- 27 『法然上人伝全書』53頁、『四十八卷伝』第六卷、大橋俊雄『法然』36頁
- 28 『四十八卷伝』第三十三卷、『法然上人伝全集』227頁

【参考文献および引用文献】

- 石井教道編『昭和新修法然上人全集』理想社 1955 年
『浄土宗聖典』浄土宗 1999 年
- 中野正明『増補改訂 法然遺文の基礎的研究』法蔵館 2011 年
- 大橋俊雄訳『法然全集（第一巻：往生要集釈・三部経大意他）』春秋社 2010 年
- 大橋俊雄訳『法然全集（第二巻：選択本願念仏集他）』春秋社 2010 年
- 大橋俊雄訳『法然全集（第三巻）：一枚起請文・消息問答他』春秋社 2010 年
- 田村圓澄『法然上人傳の研究』法蔵館 1972 年
- 伊藤唯真『浄土宗の成立と展開』吉川弘文館 1981 年
- 藤本浄彦『法然浄土宗学論究』平楽寺書店 2009 年
- 三田全信「原「知恩院」の變遷について」知恩院仏教文化研究所『仏教文化研究』第 5 号
1955 年
- 梯 信暁『インド・中国・朝鮮・日本 浄土教思想史』法蔵館 2014 年
- 塚本善隆・梅原 猛『仏教の思想 8 不安と欣求 〈中国浄土〉』角川学芸出版（角川ソフィア
文庫）2011 年
- 末木文美士『日本仏教史—思想史としてのアプローチ』新潮社（新潮文庫）1996 年
- 恵谷隆戒『浄土宗史概説』佛教大学 2004 年
- 田中久夫『鎌倉仏教』講談社（講談社学術文庫）2009 年
- 源信『往生要集』花山勝友訳 徳間書店 2011 年
- 源信『往生要集（上）』石田瑞麿訳 注岩波書店（岩波文庫）2014 年
- 源信『往生要集（下）』石田瑞麿訳注 岩波書店（岩波文庫）2013 年
- 中村 元『往生要集を読む』講談社（講談社学術文庫）2013 年
- 佛教大学仏教学部編『ブツダと法然』学術図書出版 2019 年
- 浄土宗総合研究所編『現代語訳 法然上人行状絵図』浄土宗出版 2013 年
- 大橋俊雄校注『法然上人絵伝（上）』岩波書店（岩波文庫）2011 年
- 大橋俊雄校注『法然上人絵伝（下）』岩波書店（岩波文庫）2011 年
- 大橋俊雄『法然』講談社（講談社学術文庫）2011 年
- 中井真孝『絵伝にみる法然上人の生涯』法蔵館 2011 年
- 神崎充晴・小松茂美編『（続日本絵巻大成 1）法然上人絵伝』中央公論社 1982 年
- 田村圓澄『法然』新装版 吉川弘文館 1992 年

- 寺内大吉『法然讃歌』中央公論新社（中公新書）2000年
- 阿満利磨『法然の衝撃—日本仏教のラディカル』筑摩書房（ちくま学芸文庫）2005年
- 高橋弘次『法然の宗教—万民救済の原理』浄土宗（浄土選書）2008年
- 町田宗鳳『NHK こころの時間～宗教・人生～テキスト 法然を語る（上）』NHK出版2009年
- 町田宗鳳『NHK こころの時間～宗教・人生～テキスト 法然を語る（下）』NHK出版2009年
- 阿満利磨『法然を読む「選択本願念仏集」講義』角川学芸出版（角川文庫）2011年
- 石上善應『選択本願念仏集』筑摩書房（ちくま学芸文庫）2010年
- 石上善應『NHK 宗教の時間テキスト 法然の『問答集』を読む（上）』NHK出版2013年
- 石上善應『NHK 宗教の時間テキスト 法然の『問答集』を読む（下）』NHK出版2013年
- 石上善應訳・解説『一百四十五箇条問答』筑摩書房（ちくま学芸文庫）2017年
- 元祖大師御法語編集委員会編『元祖大師御法語（全篇）』知恩院2015年
- 倉田百三『法然と親鸞の信仰（上）』廣濟堂2010年
- 山折哲雄『法然と親鸞』中央公論社2011年
- 新井俊一『親鸞「西方指南抄」（現代語訳）』春秋社2016年
- 塩谷文雄・梅原猛『仏教の思想10 絶望と歓喜〈親鸞〉』角川学芸出版（角川ソフィア文庫）2013年
- 平岡 聡『南無阿弥陀仏と南無妙法蓮華経』新潮社（新潮新書）2019年
- 齊藤隆信『円頓戒講説』佛教大学齊藤隆信研究室2018年
- 山田繁夫『法然と秦氏』学研パブリッシング2009年
- 林田康順監修『図説 あらすじでわかる！法然と極楽浄土』青春出版社2011年
- 山折哲雄監修『あなたの知らない法然と浄土宗』洋泉社（歴史新書）2013年
- 梶村 昇編『法然上人行実』浄土宗出版2005年
- 梶村 昇『勢観房源智—念仏に生きた人①』東方出版1993年
- 梶村 昇『法然上人とお弟子たち』浄土宗出版（浄土選書27）1998年
- 高橋富雄『法然新発見—「四十八巻伝」の弟子に見る法然像』浄土宗出版（浄土選書33）2005年
- 小原 仁編『「玉葉」を読む—九条兼実とその時代』勉誠出版2013年
- 慈円『愚管抄（全現代語訳）』大隅和雄訳 講談社（講談社学術文庫）2013年

吉田兼好・鴨長明『徒然草・方丈記』大伴茫人編 筑摩書房（ちくま学芸文庫）2012年

堀田善衛『定家明月記私抄』筑摩書房（ちくま学芸文庫）1996年

市古貞次『新編日本古典文学全集 45 平家物語①』小学館 1994年

梶原正昭・山下宏明校注『平家物語（四）』岩波書店（岩波文庫）1999年

山中 裕・秋山 虔・池田尚隆・福長 進 校注・訳『新編古典文学全集 33 栄花物語③』
小学館 1998年

『新編国歌大観』第五卷（歌合編、歌学編、物語・日記編等）角川書店 1995年

キーワード：臨終正念 戒師 没後遺誠

（かとう みのる 東海学園大学共生文化研究所研究員、成蹊大学非常勤講師）